

りといふ、ねたりけるこゑのしどけなきいとよくにかよひたれば、いもうととき、給つ、

〔倭訓栞前編二十一〕ぬ○中 寝をぬといふは、ぬるの略也。○中 古今集に、ぬとはしのばんといひ、

伊勢物語に、女うちなきてぬとてと見えたり、

〔萬葉集一雜歌〕譽謝女王作歌

流經妻吹風之寒夜爾、吾勢能君者獨香宿良武、

〔倭訓栞前編二十一〕ぬる○中 寝るをぬるといふは、ねるの轉也、

〔萬葉集一雜歌〕幸讚岐國安益郡時軍王見山作歌○中

山越乃風乎時自見寐夜不落家在妹乎懸而小竹櫃、

〔倭訓栞前編三〕いね○中 日本紀、萬葉集に、寐をよめり、口語にもいねのよきあしき、又正月詞に、

寝るをいねつむといふは、稻積の義也といへり、

〔萬葉集四聞〕笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首○中

皆人乎宿與殿金者、打禮杼、君乎之念者、寐不勝鳴、

〔倭訓栞中編二〕いぬる 寐をいとよみ、又ぬるとよめば、重ねいへる也、

〔和字正濫抄二〕寝 い。 朝寝等

〔古事記上〕爾其沼河日賣未開戶、自内歌曰、○中 麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐毛毛、那賀爾伊波那佐牟

遠○下

〔古事記傳十一〕伊波那佐牟遠は、寐者將宿にて、遠は毛能遠と云意の辭なり、次なる須世理毘賣

の御歌に、伊遠斯那世ともあり、萬葉二丁十に、與波來依荒磯乎、色妙乃枕等卷而、奈世流君香聞

奈世流は寐五丁八に、夜周伊斯奈佐農里、安寐不令宿、十四丁に、伊利伎氏奈佐禰入來而、寐十七

三丁に、吾乎麻都等、奈須良牟妹乎、奈須良牟妹乎、十九丁八に、安寢不令宿、君乎奈夜麻勢、また安宿